

## 詩話 静謐をたずねて

村松 眞一

いつの頃からか、私は「静寂」とか「<sup>せいびつ</sup>静謐」といった趣きに深い関心をもつようになった。たぶん、日中戦争以後、あの戦時中のことだったかと思われるが、物心がついて世の中が騒がしいと気がついてからであろう。またこれは戦後間もなくのことか、浜松工専に入学してからのことか、はっきり覚えてはいないが、私の父がある日、西洋美術の本を広げ、なかに出ていた口絵の一枚を指さし、この絵をどう思うかと聞いたことがあった。ここに掲げる絵がそれで、フランスの画家アンリ・ルソー（1844-1910）の「原始林の風景」という油彩画である。私はその印象を口に出してすぐには何とも言えず、ただ黙ってじっと見つめるばかりであった。すると父は「どうだ、いい絵だろう。いいね、実にいいね」と言った。



1910年油彩、バーゼル美術館蔵

私がじっと見つめているうちに、父が「いいね」と言っているその意味が私にも伝わってきたように感じられた。それは一言で言えば、赤い夕日を中心にこの絵の画面全体を支配している不思議な静けさであった。原始林の植物は濃密に描かれ、葉や花びらも一枚一枚丹念に書きこまれている。黒人らしき人物と豹らしき猛獣が格闘しているようだ。にもかかわらず、ここに描かれた空間には、何か時間を超えたような静けさを感じられた。また今思えば、それはこの世の喧騒を超えた静けさであったような気がする。そこには一種の安らぎさえ漂っていた。その魅力を当時の私がそこまではっきりと分析して理解できていたかどうかは怪しい。しかし一度この絵（それもただ一枚の口絵）を見た印象は忘れられず、この齢になって一層はっきりとこの絵の魅力が分かってきたように思われるのである。かなり後になって、自身画家でもあり、美術評論家でもあった岡鹿之助が、ルソーの絵の偉大さはセレニテ（清澄なる静謐）にあると指摘しているのを知り、私は納得できた。

これは絵の話であるが、ここで英詩の話に転じたい。まず、シェイクスピアの四大悲劇

の一つ『マクベス』の、主人公の最後の独白。

この芝居の第5幕第5場、部下セイトンから、お妃がお亡くなりになりましたという報告を受けて、マクベスが呟く有名な科白である。一瞬彼は瞑想にひたる。

あれも、やがていつかは死ぬに決まっていた。  
 そういう知らせを聞くときが一度はくるはずだった。  
 明日、また明日、また明日と、  
 一日一日が小刻みに這って行って  
 時の記録の最後の一分にまでたどりつく。  
 そして昨日という昨日はすべて、馬鹿者どもの  
 塵の死となる道を照らしてきた。消えろ、消えろ、束の間の灯！  
 人生は歩く影、哀れな役者だ。舞台のうえで  
 自分の出番だけ見えを切ったり、わめいたり、  
 あとはもう何も聞こえない。それは大馬鹿が話す  
 物語、ただ騒いだり怒鳴ったりで、  
 何の意味もないものだ。

工藤好美の名著『文学概論』（南雲堂、1979）の初めの章で指摘されているように、ここにはマクベスの悟りがある。ちょっと読むと、絶望あるいはニヒリズムの淵へ沈んでしまふかに思われるが、そうではない。この美しい瞑想には、マクベスが耳を澄ませたひとときがあり、この世の騒音怒号（sound and fury）の彼方に、それを超えたある落ちついた静けさ、静謐を感じとっている。ここには人生悟得、悟入とでもいうべきものが読みとられよう。この瞑想あるがゆえに、マクベスはやがて、大局的に自らの運命を甘受し、敢然として滅びの道を全うするのであり、そこに観客は偉大な運命悲劇の英雄を実感する。

次には、ワーズワスの代表作の一つ、「ひとり麦刈る乙女」（The Solitary Reaper）をとりあげてみたい。（わが国ではおおかたの英詩選のなかに入っている。）

あれを見よ、野にただひとり、  
 ひとりゐる、山家乙女の  
 ひとり刈り、ひとり歌へる。  
 足とめよ、行かば静かに。  
 ただひとり刈りつ、歌ひつ、  
 うれはしき調べを歌ふ。  
 あはれ聴け、深き溪こそ  
 その音に満ちあふれたれ。

アラビアの流砂のあひだ、

ものかげに憩へる旅の  
 群れの聴くうぐひすとても  
 かくばかり妙にはあらず。  
 世のはてのへブリディーズの  
 わたつみの静寂<sup>しじま</sup>を破り、  
 ほととぎす春鳴く声も  
 かくばかり切<sup>せり</sup>におぼえじ。

その歌を説く人もがな。  
 あはれなるふしの辿るは  
 遠つ世の幸なのことや、  
 そのかみの戦<sup>しづ</sup>の沙汰か。  
 あるはまた賤<sup>しづ</sup>の歌ぐさ  
 このごろに見聞きすること、  
 かつてあり、またもあるべき  
 悲しみや、死や、くるしみか。

何にもあれ、乙女は歌に  
 終りなきごとく歌ひぬ。  
 われは見ぬ、歌ひ、いそしみ、  
 鎌にその身をかがむるを。  
 みじろがず、静かに聴きぬ。  
 さて、山を登りゆくとき、  
 その歌は胸に残りぬ。  
 きこえざる後もひさしく。 (竹友藻風訳)

この詩は作者が妹ドロシー、親友コウルリッヂとともにスコットランド旅行に出かけた  
 ときのことかもとになっていると言われる。しかしその経験はドロシーが記録した「思  
 出」によると、この詩のとおりではなく、少し違っていた。そこには、「ちょうど収穫時  
 で、畑は静かな中にも、麦刈る人々が群れをなし、活気づいていた。ハイランドのもっと  
 寂しい地域では、独りきりで刈っているのを見ることも、珍しいことではない」とある。  
 つまりワーズワスが直接、麦を刈る娘の歌を聴いたのではなかったのである。そして実は  
 彼自身の注によると、この作品は友人ウィルキンソンが書いたスコットランド紀行の美  
 しい一節に示唆されて書かれ、しかも最後の一行はその文からそのまま一字一句使ったのだ  
 という。その一節とは、「ただ独りで刈っている女性の傍を通りすぎたが、彼女は鎌を手  
 に身をかがめ、ゲール語で歌をうたっていた。こんなに美しい声は聴いたことがなかった。  
 調べはやさしく、もの悲しく甘美で、その歌が聞こえなくなっても、余韻は長く耳に残っ  
 ていた (long after they were heard no more)」というものである。

専門家の研究によれば、このころ（1803～）ワーズワスは、いつも自分が独りのとき、そして寂しい環境のもとに、ただ独りの人物を見いだしたとき、神秘的な気分に見われたと言われる。彼がこの詩を書いたのは、ウィルキンソンの紀行文に誘発され、まさにそういう気分になったときだったに違いない。しかも私に言わせれば、作者は一種の静寂乃至静謐という絶好の詩的環境におかれたからこそ、この麦刈るひとの絶妙な歌声を彼は想像裡に聴いたのである。ワーズワス自身が言っている。「詩とは、力強い感情が、自ずとあふれ出たもので、そのもとは静けさのなかで思い起こされた情緒にある」（「抒情民謡集序文」）。これはこの詩人の詩の定義としても有名だが、同時に彼自身の詩の制作について暗示するところが大きい。ワーズワスは、静寂乃至静謐という環境の下地がなければ、優れて想像的あるいは幻想的な作品をものすことは出来なかった、と言ってよいのかもしれない。

ウォルター・デラマア（Walter de la Mare, 1873-1956）の場合には、もっと積極的に、静寂とか静謐の問題と関わってくる。彼は詩人として意識的にこうした世界を探求し、これを詩として表出しようとした。彼の「沈黙」（Silence）と題する詩がある。

変化にとむ音を出しながら命の鼓動は耳をうつ。

でも解き放たれようと懸命に

こよなく楽しい弦楽器の

何か分からぬ美しいおしゃべりや

最高に巧妙な声の

いとも気楽な麗しい調べも

ヴェールのかかった沈黙へと戻ってゆく。

動く群衆のざわめく噂のさなか、

明るい緑の大地を暗くし、

あの薄い壁に空しく反響して

トランペットは叫び、

あるいはブンブンと大きな低音で

煙のこもったようなドラム。

あの高い<sup>しじま</sup>静寂からは何の応答もない。

打ち解けた仲のよい友が二人だけで気がおけず、

思いのたけを語るとき、——でもやはり

めいめいの口から漏れる

愛情こもる声の

優しい調子のなかに

稀な言葉がふるえる。

そしてそれがあつて、<sup>ま</sup>間がすべて充たされる。

近くにかがむ人の、このすべてを包みこむ静寂は、  
不動の雰囲気が垂れこめて、  
いかに微かなざわつきも  
我らの恐れを引き起すまい。  
しかも何かの不可思議に  
傾注、没頭すれば  
我らが口にし耳にするどんな軽い言葉も聞きつける。

詩人は語る、どんな音響や音声も、それらをすべて包み込む<sup>しじま</sup>静寂の不思議さに気づかない  
わかにはいかない、と。この意味で、彼の代表作『耳を澄ますものたち他』は極めて異色  
の詩集で、なかでも「すべて年を経たもの」(All that's past) は、悠久なる天地自然の  
静謐を表出した秀作の一と言って差支えない。

森は途方もなく古いものだ。  
そして三月の風が吹き起り、  
野バラの枝から  
蕾がほころび咲きいでる  
その美しさの起源もそれほど古い――  
おお、誰が知ろう、  
何と茫々たる世紀を  
バラはあてもなく溯るのか。

小川は途方もなく古いものだ。  
澄みわたった青空の下、  
雪が冷たく眠るあたりに  
発したせせらぎも、  
来ては去ってゆく  
そうした歴史を歌う。  
その流れの一滴一滴は  
ソロモン王のように賢い。

人間は途方もなく古いものだ。  
我らの夢は、おぼろげな  
エデンの園で、イヴの小夜啼鳥が  
話してくれた物語。  
我らはしばし目覚めてさきやく、

でもその口が過ぎれば  
 沈黙と眠りが残る、  
アツランス  
 不凋花の咲く野のように。

結びの4行が特に感銘ふかい。この連は優れてメルヘン的な、侵しがたいものがある。

最後に、珍品として夏目漱石の英詩の一節を引いて拙稿のしめくくりとしたい。英国に留学し、帰ってから、彼も Silence という一篇の詩を綴った。明治36年の作。7連からなっているが、最終連5行を引く。当時彼が抱いていた沈黙（静寂）への思いを窺うことができよう。〔自らの出生時をふり返り、また死を予見して詠んでいる。〕

I look back and look forward,  
 I stand on tiptoe on this planet  
 Forever pendent, and tremble—  
 A sigh for Silence that is gone,  
 A tear for Silence that is to come. Oh my life!

ふり返り、また先を見ては  
 この惑星のうえ、私は立ちすくみ、  
 常にためらい、おののくばかり——  
 失せた沈黙を憧れては溜め息、  
 未来の沈黙を求めては涙、おお我がいのちよ！ （拙訳）

スイスの哲学者マックス・ピカートという言葉が思い合わされる。「詩は沈黙から生ずる。だから沈黙への憧れを抱いている。」（『沈黙の世界』佐野利勝訳、みすず書房）